

## 「遮那王 義経」論

（漫画家・沢田ひろふみによる義経像の造型をめぐる）

清水 慧

おわりに

参考文献・テキスト一覧

### ○卒業論文目次

はじめに

第一章 「遮那王 義経」について

第一節 メイン文献・比較文献の概要

第二節 ストーリー分析・比較

第二章 漫画独自の展開

第一節 義経の入れ替わりについて

第二項 一般に知られる「義経身代わり伝説」

第三項 「遮那王」における身代わり

第四項 二人の牛若丸

第五項 常盤御前

第六項 金太と正体露見

第二節 清盛・徳子との接触

第一項 平清盛

第二項 建礼門院徳子

第三章 沢田氏が描いた義経像

第一節 古典文学の義経像

第二節 「遮那王」の義経像

第三節 新たな義経像確立の要因

○はじめに

古典文学は、和歌・随筆のように筆者の感性を活かして書かれるもの、日記のように出来事を綴るもの、説話・物語のようなフィクションまで、多様なジャンルで描かれている。中村研究室の古典文学ゼミで活動し、多種の古典文学やその特色に触れる中で、私が最も関心をもったのが軍記である。合戦の詳細な流れや人物の信念・核となるもの、その死に様まで細やかに描かれ、故人の生きた証を残す文学であることに魅力を感じた。特に、準軍記「義経記」では、戦場で見えなかった源義経の新たな側面を垣間見、まだまだ知らないことが多いと衝撃を受けた。

今回、軍記の細やかな表現が、現代の一大文化である漫画でどのように捉えられ、変化しているかを研究テーマとし、前述の「義経記」、軍記の代表作「平家物語」と、沢田ひろふみ作「遮那王 義経」という漫画の比較・漫画独自の展開の考察を通して、沢田氏が描いた義経像がどのようなものか研究した。また、軍記での不自然な点の多さ等から、義経の生涯には多くの謎が残されている。その謎についての漫画ならではの回答についても考察した。

○第一章 「遮那王 義経」について

漫画「遮那王 義経」とは、牛若丸と入れ替わった少年が、本物の牛若丸の悲願・平家打倒に向けて成長し、源義経として生きた

物語で、第一部二十二巻、第二部二十九巻の全五十一巻からなる。

「平家物語」は、平家の繁栄から没落までを描いた、言わずと知れた軍記の代表作で、「義経記」は、牛若丸（義経）の幼少期・源平合戦前と平家滅亡後平泉での自害までを描いた進軍記である。第一章では、漫画のストーリーを書き出し、並行して読み進めた二つの軍記との共通点・相違点を逐一比較していった。源平合戦の大きな流れは変化なく進行している。漫画として押さえるべき改変・設定については、第二章において説明する。

## ○第二章 漫画独自の展開

第一章での軍記との比較から明らかになった、漫画独自の展開として押さえておきたいのは、

- ① 庶民である旅芸人（主人公）が七歳の時、同い年の牛若丸と入れ替わり、その後義経として生きた
- ② 本物の牛若丸は十六歳の時に、主人公に平家打倒を託して病死。七歳からの九年間は牛若丸が二人いる状態
- ③ 幼少期から主人公は、宿敵・平清盛と複数回接触。清盛は主人公を脅威と見なし、入れ替わりを見破るが、「民のために生きろ」という遺言を託して病死
- ④ 平家滅亡後、義経は牛若丸でないことが露見し、頼朝から追討される
- ⑤ 義経（主人公）は、部下の必死の抗戦で自害することなく平泉を脱出（影武者で自害を偽装工作）。真の義経伝説を後世に書き残す

ということである。

第一節では、主人公と牛若丸の入れ替わり設定、それに関連する人物について考察している。入れ替わりは、物語上では牛若丸の母・常盤御前が、牛若丸に危険が及ばないようにするために仕組んだものだった。また、作者・沢田氏は、平家の監視下にあった上に寺に入った牛若丸が、何故ここまで強くなれたかを疑問に思い、その謎への答えとして入れ替わり設定を用いたとしている。「牛若丸・源義経とされる人物が本当は庶民だった」という設定の下で、史実や軍記における出来事の見え方の変化が発生する。多くの出来事で見え方の変化は見られたが、それを簡単にまとめると、

- ① 一般人に当たり前の行動（例…人に頭を下げる、雑務等）が源氏という立場を得て、器の大きな大人物に見せる
- ② 戦で民が傷つくことを良く思わず、戦を避けたがる。しかし平家との戦は避けられないので、「戦を早く終わらせる、民の犠牲を少なくする」短期決戦の信念を掲げ、奇襲を多用。これが徐々に梶原景時との不仲につながり、勝手な行動と報告される
- ③ 頼朝が義経を追討する明確な理由の存在・・・庶民が平家を倒したと知れば、鎌倉・源氏は権威を無くすことができる。
- ④ ①については、入れ替わった主人公が、源氏の血の重さや平家の強大さ、武士としての常識を知らないために起こる。例に挙げたことだけでなく、清盛のような権力者にも物怖じせず、誰にでも公平に接した。この変化によって、時代の流れや常識に沿わない特別感

が演出される。これが漫画における庶民との入れ替わり設定の強みである。漫画での特別感、或いは無知故の突飛な行動は、ギャップや急展開を生み、読者を惹きつける。これは、ドラマや映画で話題の「信長協奏曲」においても同様の効果が見られる。仮に下級武士や公家の子が入れ替わりの対象だった場合、平家の強大さが理解でき、大胆な行動に出ることは難しいだろう、という結論に至った。

②については、当時の武士は真つ向からぶつかり合うのが主流とされていた中で、義経が奇襲を多用した、という謎への答えとなっている。短期決戦や奇襲の例としては、木曾義仲を一日で打ち破ったことや、一の谷の逆落としが挙げられる。こちらも、武士としての名誉ある戦い方を知らないためにできた、ともとれる。この変化には、前述の清盛の遺言が大きく影響している。「民のために生きる」という言葉は、元々民である主人公にしか響かない言葉。ましてや、「清盛の願いを叶えたいから〇〇したい」という主張は、源氏方で受け入れられるはずもない。それ故、自分だけの信念として短期決戦を狙い、勝手な行動につながっていく。

③についても、軍記では「梶原景時の讒言のため」「義経が頼朝にとつて代わろうと企んでいるため」「検非違使任官に頼朝が怒ったため」等、諸説ある義経追討の謎への答えとなっている。

また、主人公は入れ替わった後九年間鞍馬寺に入れられることになるが、この間本物の牛若丸は、一年間旅芸人として過ごした後、死の直前まで自分の屋敷の倉にこもって、主人公に兵法や六韜の教えを文で伝え続けた。主人公自身は僧正ヶ谷で天狗と武芸を磨き、

二人の力が合わさって大將軍・源義経の活躍につながるとされている。軍記において、武芸の鍛錬の描写はあっても兵法を学ぶ描写がないこと、六韜を手中にするエピソードの不自然さから、「なぜ義経が兵法や軍略に通じているのか」も謎の一つとなっていた。沢田氏は、二人いる状態によって不自然さの解消を狙ったのだと考えられる。そして、平家打倒という牛若丸の悲願のために、義経は源平合戦を戦い抜いた。

さらに、義経が偽者だと発覚する背景には、源氏方の雑兵となっていた、旅芸人時代の友・金太（オリジナルキャラクター）の動きがある。源氏の者として生きる使命を託された主人公は、金太と関われば正体がばれると考え、彼を無視する。それが理由で、金太は正体を明かしてやろうと主人公をつけ狙い、それがもとで梶原景時に正体が露見した。この物語は、主人公と牛若丸、或いは弁慶ら部下との、友としての絆が強く描かれているが、金太への姿勢は主人公の作中唯一の不義で、逆説的に絆の物語であることを示している。

この節では、義経が北海道に逃れたとする「北行伝説」や、松本新八郎氏が唱えた「義経二人説」、或いはインターネットサイトで発見した「義経Ⅱ秀衡の部下説」を取り上げ、平泉在任時の記述がほとんど見られないことや、自害後その首が鎌倉に届くまで四十三日を要していること等、二つの軍記の記述或いは義経の生涯の抱える問題点を暴いた上で、「遮那王」がそれらの問題点がある程度クリアし、説得力ある展開となっていることにも触れている。

第二節では、平家方であり、史実では邂逅のない平清盛と建礼門院徳子それぞれのかかわりを用いた意義について考察している。

主人公と清盛は、入れ替わり直後に初めて出会い、その場で常盤御前に悪戯をする清盛を戒めたことで、当時全盛期の清盛は、それまでなんとも思っていなかった牛若丸Ⅱ主人公を脅威と認識し始める。武士としての成長を未然に防ぐために、本来常盤が勧めた鞍馬行きも清盛の策略として扱われた。鞍馬に入ったことで、本格的に主人公が牛若丸として世間に認識されることになる。

鞍馬でも奥州でも、度々清盛は主人公抹殺のため刺客を差し向けるが、悉く失敗。刺客との戦いの中で、主人公は平家の世を変えなければならぬ使命感や、義経という名前を決める等、着実に武士として成長していく。

さらに前述したような、最後の遺言の効果。清盛は、源氏の子・牛若丸として生きていくことと、自らの戦の信念の形成、主人公の生涯の大きな契機二つに直接的にかかわっている。第二部第八巻という早い退場ではあるが、この漫画を語る上で清盛の存在は欠かせない。

加えて、建礼門院徳子との間にも、史実にはない幼少期の出会いが追加されている。壇ノ浦で平家を滅ぼすことは、源氏の悲願であると同時に、お互いを案じていた徳子の全てを消し去ることもあった。それを理解した主人公には、勝利の喜びよりも、多数の命が失われた悲しみが色濃く見え、戦の愚かさ・悲しみを高める効果が、徳子との接触にはあった。

### ○第三章 沢田氏が描いた義経像

学校の歴史の勉強では、平家を滅ぼした功績と、頼朝に追討された悲劇的最期が主に取り上げられるが、そもそも義経がどんな人間だったか、までは踏み込まないことが多い。二つの軍記から見られた義経の人物的特徴は次の通りである。

#### ①戦上手

例) 一の谷の逆落とし、屋島での奇襲(平家物語)

#### ②怒りやすい・好戦的・残虐

例) 梶原景時との度重なる喧嘩(平家物語)、討ち取った者の首を刀に刺し、鬼一法眼の屋敷に投げ捨てる(義経記)

#### ③自己主張が強い・わがまま

例) 逆落としや壇ノ浦で、総大将なのに先頭を切って戦いたがる、嵐で船を出したくない船頭を、「殺す」と脅して無理矢理出航(平家物語)

#### ④部下や仲間への情に厚い

例) 屋島で討死した佐藤継信に、生前欲しかった自らの愛馬を供える(平家物語)、藤原秀衡の死や、吉野山で囷となる佐藤忠信との別れに号泣(義経記)

#### ⑤女に弱い

例) 京から逃げる際、静御前を含め二十数名の恋仲の女性を同伴(義経記)

#### ⑥名誉や恥を重んじる

例) 弓流し(平家物語)

これら六つの特徴一つ一つと比較していく形で、「遮那王」の主人公・義経の人物像を考察していった。

まず①については、本来義経が参戦していない富士川の勝利等も義経の策によるものとなっていて、軍記よりも強調されていると言える。判官最良作品になっていることは間違いない。しかし、第二章で述べたように奇襲を多用したのに加え、敵との直接戦闘を避け、威圧して追いつ返す策も多用したことから、大將軍のイメージからはやや外れる印象も受けた。

②については、完全に真逆の性格。乱戦で両軍或いは民に大きな被害が出るのを最大限避けようとし、無駄な殺しを嫌った。この変化に大きく影響するのは、庶民が入れ替わったことと清盛の遺言である。その効果は第二章で述べたとおりだが、本物の源氏が積年の恨みを持って戦うのと、他人が友の悲願のために戦うのでは、目指す終末にズレが生じるのも無理はない。この変化の背景にある作者の狙いについては後述する。

③については、軍記と同様の自己主張の強さが見られた。しかし、義経視点の物語であることから、その行動の裏にある信念は説明がついているので、読者にわがままとは捉えられにくいと考えられる。

④については、私の印象としては軍記以上に強調されている。部下や静御前・秀衡のような仲間はもちろん、世間的に疎まれた存在や、木曾義仲の息子・義高のような不都合な存在にも積極的に手を差し伸べ救おうとしてきた。たとえ鎌倉の意に反する行動であつても、である。民として生きてきた七年間が、血筋や武士の暗黙の了解よりも、自分の信じる正しい道を優先させている、と言える。軍

記では陵兵衛の館への放火等、自分に素直故に他者を虐げることもあったが、「遮那王」では弱い者いじめをする者や仲間を傷つける者を罰するのみである。また、必要以上にコミュニケーションを取ろうとし、疎まれたりする場面もあった。強調の背景にある作者の狙いは②同様後述する。

⑤の特徴は見られなかった。「遮那王」の義経は、自他ともに女性を苦手だと認めている。ヒロイン候補として、静御前、河越重頼の娘（作中では偽者で、本名かすみ）、徳子らが挙げられるが、最終的に静との純愛に恋愛面は収束しており、この特徴を出すストーリーの脱線が大きくなる、と考えたのだろう。

⑥の特徴も見られず、むしろ真逆とも言つていい。元々旅芸人で、一日一日を生きることに精一杯だった主人公には、源氏の血の重さや誇りは理解されない。雑用や簡単に頭を下げるのもそのためである。彼にとつては食うのに困らず寝る場所も確保された武士の生活はそれだけで恵まれていた。そして、地位や恩賞よりも、牛若丸の悲願達成が何よりも目的だった。そのため生活や恩賞を与えない頼朝の待遇に一切不満を見せなかった。

ここからは大きな変化の要因について考察する。

まず、好戦的性格や残虐性を排除した要因は、義経を万人受けするキャラクターとするためだったと考えられる。現代日本は、大戦を経て平和主義を掲げ、戦争をしない意志を持った国である。軍記の義経は残虐性が垣間見える上に口も悪く、忠実に内容を再現した時に、現代の読者全員に好まれる人間には見えなかった。「遮那

王」は、義経或いは源平合戦に興味を持つてもらう狙いで書かれたものであり、そのためには義経が多くの人に支持されるヒーロー的存在であることが必要となる。ヒーローに黒い要素は最大限排除すべき。それ故残酷性を排除し、その結果戦や殺しを嫌う性格となる。そうすると前述のように、相手を威圧して戦意喪失を狙う等、戦い方そのものや作戦の真意も変化してくる。漫画での自己主張も「戦を避けたい、或いは早急に終わらせたい、無駄な死を止めたい」という思いの下であり、軍功や名誉に飢える軍記の義経の自己主張とは異なる。こうした変化のベースとして、「元々庶民・旅芸人である」という設定が存分に活かされているのだ。主人公の目には敵味方、或いは武士も民も同じ人間に映り、それらの命が等しく散りゆく戦は、愚かな行為以外の何物でもなくなっていくた。

また、部下や仲間想いの一面を強調した背景には、部下の設定が影響していると考えられる。「遮那王」の義経の部下は、虐げられた過去を持つ臆病な悪僧や、武士を捨てた口の悪い山賊等、クセが強く他人を信用しない人間が多くいた。義経は、人の内面や物事の本質・正義を深く理解し、かつ正面から自分の意見をぶつけることでこれらを従えてきた。また、自分が信用した人間のためなら自分の地位を忘れて行動する姿に心を動かされた者も多かった。史実において、義経郎党は系譜未詳Ⅱ由緒ある武士の出身でない者が殆どで、東国の豪族が集まった鎌倉方の中でも異質の集団であったことが予想される。ここから、史実の義経も、地位ではなく能力や人柄で部下を集めていたことも想像できる。漫画では、絵が用いられる

ことで、部下の異質さを極端に描くことができた。それに併せて、義経の器の大きさも極端に描かれたのではないだろうか。また、軍記の義経には、世間からの評判を気にするあまり、行動を制限される場面も見受けられた。漫画と軍記を並行して読むことで、「立場どうのこののよりも、人としてどうあるべきか、自分の正義を曲げないで生きているか」をより考えさせられる効果があった。

以上の考察から、私は沢田氏が描いた義経像を、

人への愛情に溢れ、自分の信じる道を歩いて、

戦を嫌い戦の世の終結を目指した、新しい形の戦上手と結論づけた。

これらの変更は、作者・沢田氏が「史実よりも面白さ重視」と明言していることから、あくまで義経或いは源平合戦に興味を持つてもらうためのものであり、それ以上の意味はないのかもしれない。しかし、前述のように、義経の生涯には不審な点が多い。この作品は、フィクションながらも整合性のついた展開で、この作品を通して歴史の謎や軍記に興味を持ち、古典に親しむ人が増加するのを期待したい。

○おわりに

漫画と比較しながら古典を読むことで、改めて古典の表現一つ一つに注意しながら読むことができた。また、作者が漫画に込めた

テーマやメッセージの背景を真剣に考えるという、現代の若者にとつて、楽しみが勝る故に深めるのが難しい活動に取り組む経験ができた。漫画を用いた中学校国語の授業は現行の教科書にもあるが、私も大好きな漫画の力を借りて、「楽しみながらいかに学ぶか」を試行錯誤し続けていきたい。

本研究には課題も多く残っている。比較文献を軍記に絞り、作者が参考にしたと明言した「吾妻鏡」を用いなかっただため、比較の精度が低い点、インターネット情報や私の主観的主張が大半を占め、客観的根拠が薄い点等が挙げられる。

最後に、本論文の執筆に多大なるご協力・アイデアをくださった中村一基先生と、一年間共に努力してきた仲間に厚く御礼申し上げます。